九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

抑うつにおける自動思考の制御困難性と思考コントロール方略 ： ＡＢＭＣモデルの提案とＢＭＣの検証

義田，俊之

https://doi.org/10.15017/4060258

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名	義田　俊之
論　文　名	抑うつにおける自動思考の制御困難性と思考コントロール方略 ――ABMC モデルの提案と BMC の検証――
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中　村　知　靖 副　査　　九州大学　　教授　　山　口　裕　幸 副　査　　九州大学　　教授　　黒　木　俊　秀

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，感情障害の認知理論と臨床メタ認知理論を統合した抑うつ症状に関する新たなモデルを提案し，調査データに基づき実証的にモデルを検証したものである。このモデルは，抑うつを認知の観点から捉え，ストレスフルな外的事象（Activating event）によって活性化された自己スキーマ（Belief）から自動思考が生じ，その自動思考に対処するために非適応的な Metacognition（思考コントロール方略）が発動される結果，自動思考が制御困難となって Consequences（症状）に至るプロセスを説明したもの（ABMC モデル）である。研究１では，自己スキーマ，自動思考，抑うつ症状に関する質問紙調査を実施し，構造方程式モデリングを用い，自己スキーマが自動思考を経て抑うつ症状に影響を与えることを示した。研究２では，思考コントロール方略を測定する Thought Control Questionnaire（TCQ）の日本語版（TCQ-J）を開発し，十分な信頼性と妥当性をもつことを示した。研究３では，思考コントロール方略と抑うつに関連した変数（抑うつの自動思考，反すう傾向，抑うつ症状）との関連を検討し，思考コントロール方略と抑うつに関連した変数間に一定の関連性があることを示した。研究４では，短期縦断調査を行い，媒介分析を利用し，思考コントロール方略が，抑うつの自動思考と，その後の自動思考の頻度や思考の制御困難感を媒介する効果を明らかにした。研究５では，慢性疼痛患者を対象に調査を行い，思考コントロール方略が抑うつ症状を招くとされる破局的思考影響を与えることを示した。上記で示したように，本論文では，自己スキーマ，自動思考，思考コントロール方略，抑うつ症状に関する新たなプロセスモデルを実証的に検証しており，心理学の領域に新たな知見をもたらし，学問発展に寄与する研究である。よって，本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。